

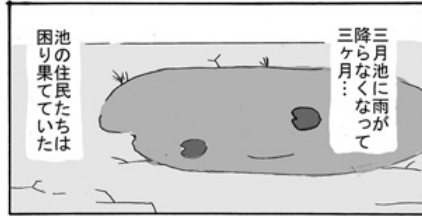


雨が

降ら

ない

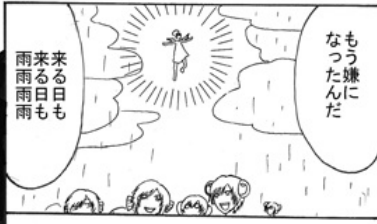
雨が降らない





青蛙君  
ごく普通の  
二十代青年青蛙  
最近色々あせっている

其ノ三 理由



目高君  
ごくふつうの十代  
ティーンズメダカ  
ちょっと多感な時期



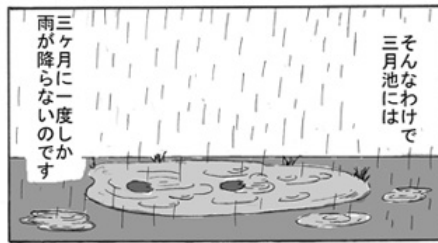


雨神君  
将来の夢はニートの口癖はただ退屈なだけで生きてると「果たして言えるのだろうか…」





じーちゃん  
昔は彼も「青蛙君」と呼ばれていたのであろう(多分)



内は3.0 Yシャツを着て

雨神君



かん  
とい  
い



ジャケット  
-見のスペース  
-テリを入れる  
青足長靴

蛙君



ラフ画

腹だけ →  
ホッカイ和  
緑のカズレスーツ



## 序

---

鼻についた甘い香りに誘われるように、視線を窓に投げた。

穏やかな風が薄黄色のカーテンを揺らしている。

窓際にそっと寄って、片手で薄い布を避ければ、天上を越えた太陽が淡い雲に隠されているのを確認できた。建物自体が小高い丘にあることに加え、二階に位置するこの部屋からは、丘の向こうの川までを見通すことができる、

眩い光を避けるように目を落とせば、真っ赤な花卉を誇らせる群生が一面に広がっているのに気がついた。甘い香りの主はこれだろう。

「ルジュレの花か」

いつの間にか、そんな季節になっていたのか。人知れず流れる時に、思わず笑みを零して、それから急に思い立ち、手の平を窓の外へと翳す。

「おいで」

一際大きな風が吹いて、ルジュレの赤い花を薙いだ。風は花卉のいくつかをさらい、くるくると上空へと舞い上がる。赤い花卉はまるで導かれるように列をなし、その手の平へと落ちてきた。

両手の平にいっぱいとなった花びらを愛おしげに眺め、指の間から零れてしまわないように慎重に窓から離れる。向かう先は、部屋の中央にある革張りの古びたソファだ。

もう長らくこの部屋の主であるソファには、その年数相応の傷や汚れが付着していたが、手入れをきちんとなされているのか、へたれた様子は一切ない。

そのソファの上に寝そべる者がいた。張りなおされた黒皮のごとくの艶やかさをもつ髪が滝のようにソファから床へと流れている。前髪の一房だけが、まるで染めているかのように白く、その顔を隠していた。手足を丸めるように横になり、白いタオルケットを抱え込んで眠る姿は子供のよう。

もっとも無垢な子供とは言える歳ではない。健やかな寝息を立てて夢の縁に立つのは、二十代半ばほどの女だった。傍に寄ってきた人の気配にも目覚めることなく、無防備に寝顔をさらしている。

手の平で作ったお椀を眠る女の上に運ぶと、少し考えた後、指先を崩した。最初は一枚、それから連なって花びらは落ちる。真っ赤な花びらが女の上に、ソファの上に、床の上に散らばる。

赤い花に埋もれる女。それはまるで血にまみれているようで。

「やっぱり」

指先に引っ掛かっていた花びらを払い落とし、唇を歪めながら眠る女を見下ろした。僅かに動いた右足が、足元に零れた花びらを踏み躪る。

「君に赤は似合わない」

まるで、全ての答えがそこにあるかのように、満足げに小さく笑って、眠る女の髪に指先を絡めた。

「さて」

女が目覚めないことを良いことに、散々髪を弄練り回したあと、改めて部屋の中を見渡す。それなりの広さを誇る部屋は、壁一面に本棚が設置されていた。だが、本棚にはたった一冊の本さえない。

がらんとした室内にあるのは、本のない棚と、黒皮のソファ、そして、部屋の隅に鎮座する金属の箱。それが、この部屋にある全てだった。

ソファの傍を離れ、金属の箱へと近付いていく。

踏み潰された花びらが、甘い風に弄ばれるように床を転がった。

## 盗まれた名

ステオン・リーガロがオメガに仕え始めてから、五年の歳月が流れていたが、今回のような事件が起こったのはこれが初めてだった。もちろん、これまでも順風満帆な日々であったとは言いがたいが、起こる全ては主人であるオメガが引き起こすものが大半だった。

ステオンが尻拭いさえすれば――それがあまりにも理不尽なことであったとしても――それらの問題は全て解決できたとし、解決できるだけの能力は持っていると自負していた。

だが、今回起こったそれは今までのどの問題とも違い、たとえ、ステオンがリーガロの名を継ぐものだとしても、その手で解決できる事態とはかけ離れていた。

「レディ、オメガ」

いつなく強張った表情で主人の名を呼べば、呼ばれた本人は渋面のまま、指で小さな金属の欠片を回転させた。くると円を描いたそれは、やがて彼女の手から零れ落ち、硬い音を立てて机の上に転がる。

いくつもの金属の欠片が机の上に広がり、それを細い指先でオメガは愛しげに撫でていく。

「レディ、オメガ」

先ほどより強い口調で呼びかければ、オメガはようやく顔をあげて、ステオンを見た。

はらりと舞った長い黒髪は、前髪の一房だけが染めたように白い。雲月色の瞳に不満の色を――或いは不穏かもしれないが――浮かべ、どこか面倒くさげに溜息をついた。

「事は一刻を争います」

できるだけ、平静を装ってステオンは言った。事の内容を思えば、冷静でいるのは難しかったが、いつになく静かな主人に自然と心が鎮まるのを感じていた。

「事態が表沙汰になる前に、なんとかしなければ――」

「わかっておる」

ステオンの言葉を遮って、重ねていた視線をふいと逸らす。その口元に淡い笑みが浮かぶのをステオンは見た。

オメガとステオンはそう幾つもの歳は変わらないように見えるが、実際のオメガの年齢をステオンは知らない。一度尋ねてみたことはあったが、「女性に年齢を聞くとは恥知らずな」と罵られたので、それから年齢の話はしたことはない。

そもそも、オメガが人並みに歳を取る存在なのか、ステオンは知らない。オメガ以外のオメガが存在するかどうかとも知らない。ステオンが知っているのは、今、目の前にいるこのオメガがリーガロである自分にとって唯一の主人であるという事実だけだ。

それだけで十分だと思っていた。

「なんとかしろと言われてものお」

長い髪を掻き揚げて、オメガは机の上で腕を組み、頬杖をついた。

「わしにも何がなんだかわからんのだ」

笑みは消え、代わりに心底困ったようにつぶやく。

それを額面どおりに受け取っていいものか、ステオンは悩んだ。彼女が真面目に何かを悩んだり、本気で困ったりする場面をこの五年間一度として見たことはない。

彼女にとって予期せぬ出来事は全て歓迎すべきこと。暇と日常を厭う彼女にとって、今のこの状況さえ、ちょっと難しいゲームのようなものでしかないのかもしれない。

普段ならば、ステオンもそのお遊びに付き合っただけの余裕はあるのだが、今回だけはそうはいかなかった。

事はオメガだけの問題ではない。多くの命に関わることなのだから。

「レディ、オメガ。万が一、取り戻せなければ」

「その場合は、『空から落ちる水』は永遠に失われたままだろうのお」

他人事のように呟かれた言葉に、ステオンは首を左右に振った。

「その場合、名の統治者である貴女は、民衆に八つ裂きにされることでしょうね」

脅しのような呟きに、オメガは声を立てて笑った。

アルファが生み出したる名をオメガが管理する。

世界の理は、そう定められている。

全てのモノは「名」によって形と意味が与えられ、「名」によって存在を示す。

「名」付けの主、アルファは「名」を生み出すことのできる唯一の存在であり、全ての「名」は、始まりのアルファから生まれる。その口から零れる言葉は「名」となって存在を示し、形となって具現化する。

無数の「名」が、無限の「名」が、囁きと共に生まれる。

そして、アルファが生み出したる「名」を管理するものこそ、名の統治者である終わりのオメガだ。

そのオメガが管理する名の一つが盗まれたのは、太陽の季節を間も無くとした頃だった。盗まれた名は「空から落ちる水」が形作るもの。

そして、それは全ての命に直結するとても重要な名だった。

## エスケーカー

ある人物を尋ねるために、二人はオメガの屋敷を出て、海の近くまでやってきていた。長く続く砂浜を、波の音に耳を傾けながら歩いていく。

正直な話、ステオンはその人物を頼りたくはなかった。できることならば、オメガをその人物に近づけることを避けたかった。

しかし、現状を打開する手がない以上、ありとあらゆる手段をとらなければならない。

「名」を盗んだと思われる人物たちに心当たりはあった。しかし、彼らを探すのは非常に難しいこと——ましてや、「オメガ」にとっては不可能に近いことだ。

だからこそ、ステオンとオメガが知る彼らに近い唯一の人物を頼るほかなかった。

その人物は砂浜に続く岩場にある漁師小屋で生活していた。小屋の周りにはそれらしく魚の干物が干されていたが、それが「彼」が捕って来たものではなく、オメガが気まぐれに送っているものであることをステオンは知っていた。

小屋に近付くに連れて、ステオンの足取りは重くなっていく。一方、オメガは陽気にスキップを披露して見せた。

「あーちゃん、いるかいのお」

小屋の入り口に掛かるすだれを押し分け、オメガは中を覗きこむ。

「あーちゃん、あーちゃん」

何度か声をかけてみるが、戻る言葉はない。

「留守でしょうか？」

いないなら、仕方がない。ステオンはどこか安堵する自分に気がついていた。

「留守じゃないよ」

すぐ間近で聞こえた声にステオンは咄嗟に飛び離れた。

いつ、近付いてきたのか、ステオンのすぐ横に一人の男が立っていた。

すらりとした瘦躯を白い外套に包み、長く伸ばした白髪を後ろで結んでいた。前髪の一房だけが染めたように黒く、色のない白い顔を影のように覆っていた。

「い、いきなり、声をかけないでください」

「そりゃあ、失礼」

にやり、と笑ったその顔が、あまりにも見慣れたもので、ステオンは思わず息を飲んだ。

「あーちゃん、おひさあ」

「おひさあだね、あーちゃん」

オメガが抱きつけば、その男は顔と同じく色の薄い手でその頭を撫でた。

オメガと彼は冗談なほど良く似ていた。性格が、ではない。もちろん、その性格も良く似ていたが、特筆すべきはその顔だった。

まるで鏡に映したようにそっくりなその顔。

違いといえば、オメガが黒髪に一房だけ白髪なのに対して、彼は白髪に一房だけ黒が混じる。「彼」が男性であるがためか、身長はオメガよりも頭半分高い。

双子、と誰もが思うかもしれないが、本人達曰く、義兄と義妹の関係らしい。

ステオンはその言い分を信じていない。

オメガがオメガゆえに、あるいは彼が名を捨てた「エスケーカー」ゆえに、兄妹ではなくなったのではないかと考えている。オメガが彼を兄ではなく、「あーちゃん」と呼ぶのもそのためではなかろうか。

「あーちゃんが、尋ねてくるなんて珍しいね。いつも俺が屋敷に行くのに」

「それがのお、ちっと困ったことになってのお」

眉を寄せたオメガに対し、彼は心底心配そうに義妹の顔を覗きこんだ。

「あーちゃんが困るなんて、それは一大事だ」

「だろうのお」

「いよいよ、世界の終わりかな？」

「それは困るのお」

「それは困るよねえ」

身を寄せ合ったまま、きやつきやと騒ぐ義兄妹に、ステオンは一気に距離を詰めると、二人を引き離れた。

「レディ、オメガ。お立場をお考え下さい。オメガである貴女がエスケーカーと懇意にするなど、周囲に知られでもしたら」

名を統治するものが、名に反逆したものと兄妹であるなどと知られたら、オメガの存在自体が揺らいでしまう。

それに対して、オメガは、両手を重ねると、

「いやあん、男の嫉妬はいやらしいぞ」

「だ、だ、誰が嫉妬なんて」

予想にもしていなかったことを言われて、ステオンは一瞬たじろいだ。すると、

「義妹が欲しければ、俺を倒してからにしろ」

彼が身を乗り出し、オメガを庇うように立つ。

「ちょ、ちょっと、いや、そんな話はしてませんけど」

「ああ、わしのために二人が争うなんてのお」

「あーちゃんのためなら、たとえ、火の中水の中さ」

「待って下さい。なんでそこまで話が飛躍して……」

「なんだ、スーちゃんはわしのために戦ってはくれないのか？」

不安そうな目で見つめられ、ステオンはぐっと押し黙る。

この目に騙されていけないのはわかっている。だが、ステオンはリーガロだから。オメガのために、生きるのがリーガロの役目。

オメガが戦えと命ずるならば――。

「まあ、冗談はそこまでにしてだのお」

「おーちゃん、ここは寒いから中に入ろうか」

手の平を返したように、途端に態度が変わった二人に、ステオンはついていけずに、啞然とする。

彼はオメガを招き入れるため、小屋のすだれを持ち上げた。

「なにをしておる。早くこんか！」

真っ先に小屋の中に入ったオメガがステオンを呼ぶ。

ステオンはその声で我に返ると、がっくりと肩を落とした。

「名」はそのモノの形を作り支配する。それはすなわち、「名」を生み出したアルファが名のあるモノの支配者ともいえる。

そして、アルファが生み出したモノはオメガが管理する。世界はそう成り立っている。

だが、「名」を持たぬモノというものも、少なからず存在した。それらは、「名」の支配を厭い自ら名を捨てた。或いは、「名」の統治者であるオメガが「名」を剥奪した。

存在の形を失わないために、「名」を失ったものたちは自らをこう称するようになった。

エスケーカー、と。

## リーガロ

---

オメガの義兄である彼はエスケーカーである。

エスケーカーは、白髪銀眼であることが多い。彼もまた例外ではなく、白髪銀眼の持ち主だった。

唯一、他のエスケーカーと違うところは、前髪の一房にだけ色を残していること。なにより、名の支配者である——エスケーカーにとっては宿敵とも呼べるオメガと非常に仲の良い関係であるということだ。

ステオンが危惧しているのは、オメガと彼の関係が表沙汰になることである。

本人達が否定していても、二人の間に血縁関係があるのは二人の容貌から明らかだ。世間的に負の存在として認識されているエスケーカーと、アルファの代理人とも言えるオメガが兄妹。

その事実が明らかとなれば、混乱が起きるのは目に見えている。それだけはなんとしても避けなければならなかった。

もっとも当の本人達は一向に頓着しない。ステオンにできることといえば、できる限り二人を接触させないことだった。

それこそ、こんな事態でなければ、ここにオメガを行かせるような真似は絶対にしなかった。

「ああ、しまった。籠を置いて来てしまった」

木の板が張られた狭い居住スペースに座り込んだ彼は、慌てたように声をあげた。

「籠かのお？」

「そう、籠。おーちゃんのために野いちごを摘んでおいたんだけど、うっかり岩場のところに置いてきてしまった。取りに行ってくるよ」

立ち上がりかけた彼を、オメガは片手で制した。

「わしが取ってくる。岩場のところなの？」

くるり、と身を翻すと、兄の返事も待たずにさっさと小屋の外に飛び出していった。その後姿を彼は微笑ましそうに見つめていた。

小屋の中に残された二人。

ステオンは居心地の悪さを感じていた。

ステオンはオメガの義兄に対する嫌悪を隠そうとしない。隠す理由もない。名を持つ者が、名を持たないエスケーカーを嫌うのは本能に近い。

もちろん、彼もそのことを承知している。

オメガの後を追っていけばよかったと思ったが、今更立ち上がるわけにもいかず、ステオンはこの沈黙に耐えていた。

「ステオン・リーガロ」

「……なんですか？」

沈黙を破ったのは彼だった。彼の視線が横顔に刺さるのを感じていたが、ステオンは彼の方を見なかった。

「君は、あの子のことが好きだろう」

断言口調で告げられて、ステオンは相手が何をいったのか、すぐには理解できなかった。

ゆっくりと彼の方を振り返り、そして、たった今発せられた言葉の意味を理解すると、

「い、い、いきなり何を」

「何って。君はオメガのことが好きだって話だけど？」

「だ、だれが」

「君が」

動揺するステオンに対し、彼は真面目な表情で見つめてくる。オメガと同じ顔が見つめてくる。

その事実、顔が熱くなるのをステオンは感じた。

「でも、駄目だよ」

冷めた声音が鼓膜に響いた。それが目の前の口から発せられたものだと、ステオンはすぐに気がつかなかった。

「駄目だよ、あの子を好きになっちゃ」

銀の双眸が細まり、睨むようにステオンを射抜いた。ステオンは、反射的に身を引こうとしたが、それよりも先に身体を寄せてきた彼が腕を引いた。

「君はリーガロだ」

心臓を刺すような氷の声。小屋の中の温度が一気に下がったかのようなだった。得体の知れない恐ろしさに、ステオンは身動きが取れなくなる。

彼は笑った。

オメガの前ではけして見せない冷酷な笑みを浮かべた。

「リーガロは公平な目でオメガを制御しなければならない。制御者がオメガに飲み込まれてはならない。でなければ、リーガロの意味がない」

怖い、と思った。目の前のエスケーカーが怖いと。相手は丸腰で何も恐れるものはないというのに、逆らうことを許さない恐怖がステオンに襲い掛かった。

「あーちゃん、籠あつたぞお」

暢気な声が割り込んできたのはそのときだった。

彼は掴んでいたステオンの腕を引くとそのまま、背中から床に倒れた。身を硬くしていたステオンはその勢いに耐えることができず、彼の上に折り重なるように倒れる。

強か鼻先を床の板にぶつけることになり、思わず叫んだステオンの耳に届いたのは、

「なにをしておる！」

鼻を押さえて振り返れば、大きな籠を手にして怒りの表情を見せるオメガの姿。どうしてオメガが怒っているのか。ステオンは首を傾げたが、

「おーちゃん、たすけて。襲われるう」

手を動かして叫ぶ彼に、ステオンはようやく状況を理解した。彼に腕を引かれたせいで、ちょうどステオンが彼を押し倒しているような状況になっている。

プラスして彼が怯えたような表情を浮かべているのだから、オメガが勘違いするのも無理もない。

「レディ、オメガ。ご、誤解です！」

慌てて彼から飛び離れる。

「おーちゃん、怖かったよ」

でかい図体を震わせて義妹に抱きつく義兄。オメガは義兄の肩を抱きながら、ステオンに燃える瞳を向けた。

「あーちゃんを襲うとは許せんっ！」

「だから、誤解ですって」

「言い訳とは、武士たるもの情けない」

武士になった覚えはないが、そのことを突っ込む余裕はステオンになかった。

顔を伏せていた彼がステオンに目を向けた。その口元に笑みが浮かぶのを捉えた。

## 「名」のありか

はめられた、と気がついたが時は既に遅し。オメガの焼き殺さんばかりの視線に弁明することもできず、ステオンは意味のない呻きを漏らすばかりだった。

「そういえば、何か用があったんじゃないのか？」

オメガの腕で怯えるふりをしていた彼が思い出したかのように呟いた。

「おーちゃんから、きてくれるなんてよほどのことだろう？」

義妹の腕を解いて、正面に向き直る。明らかな態度の変化だったがオメガは気にも留めず、義兄と共に床に腰を下ろす。

「それがのお。なにやら、厄介でのお」

ステオンとオメガの目が合う。雲月色の目にはもう怒りは宿っていなかった。

義兄妹は口元に弧を描いている。ステオンは、また、からかわれたことに気がつき、肩を落とした。

「名前が盗まれたんですよ」

溜息と共に言葉を吐き出す。

「盗まれた？」

彼は目を瞬かせ、オメガとステオンを交互に眺めた。

「スーちゃん、説明よろしくのお」

難しいことは苦手だと、早々と説明義務を放棄したオメガに、げんなりしながらも、ステオンはこれも仕事だと口を開く。

「『空から落ちる水』の『名』が喪失しています。状況から見て、盗まれた可能性が高いのですが。統治者が管理する『名』を盗める存在といえば」

「エスケーカー、というわけか」

ステオンの言葉を遮って彼が言う。兄も妹も、人の話を最後まで聞く気がないらしい。そう思ったが、ステオンは賢明にも口に出したりはしなかった。

「それで、ここにきたわけか」

「……エスケーカーに詳しいのは、エスケーカー本人ですからね」

皮肉を込めたステオンの言葉に、彼は首を竦めることで応えた。

「だが、それに関しては力になれそうにないね。俺は見たとおり、エスケーカーとしてかなり特殊なタイプだしね。

所謂、はぐれもの、一匹狼ってやつ」

「おお！ あーちゃん、かつくいー」

「はっはは、照れるな」

このバカ兄妹め、と内心毒づきながらも、情報が得られなかったことに危機感を抱いていた。まさに振り出しに戻るである。

「レディ、オメガ。帰りますよ」

ええー、と不満の声をあげるオメガを無視して立ち上がる。これ以上、ここにいるだけ時間の無駄な上、精神の疲労が蓄積されていくだけだ。

「『空から落ちる水』ね」

抵抗するオメガと、連れ出そうとするステオンを眺めながら、エスケーカーは手の平に握ったそれを指先で持ち上げた。

「それってもしかして、これのこと？」

「えっ？」

「おっ？」

彼の手に握られていたのは、金属の小さな欠片。ステオンの手から逃れたオメガが義兄に近付き、まじまじとそれを見つめる。

「あーちゃん、それどうしたのだ？」

「この間、おーちゃんのところに遊びにいったとき借りたんだけど」



「……わし、知らんがな」

「そりゃあ、そうだよ。おーちゃん寝てたし」

悪びれた様子もなく、義兄はへらりと笑う。ステオンは脱力してその場に膝をついた。

散々悩んだのがバカらしいオチだ。最初から、自分たちがここにくることを彼は分かっていたのだろう。事情を知っているが知らぬふりをしていた。さすが、オメガの兄というべきなのか。

「あーちゃん、じゃあそれ返してくれる」

オメガが手を差し出す。だが、彼は指先で金属片を弄ぶばかりで、オメガの手に返そうとはしない。

「あーちゃん？」

彼は義妹に満面の笑みを向けると、

「返してあげない」

「はっ？」

ステオンは間抜けな声をあげた。

「……むう、それは困るのお」

オメガが全く困っていない口調で言った。

「返して欲しければ、奪い取ればいい」

冗談とも本気ともつかない口調で歌うように告げると、彼は優雅に身を翻す。

それは劇的一幕を見るような、鮮やかな動きだった。

白い外套の裾が大きく広がったと思った瞬間、彼の姿は唐突に消え失せた。視界から、一切の痕跡を残さずに消失した。

「やられた！」

叫んだのはステオンだった。慌てて立ち上がり小屋の中を見渡すが、その姿を見つけることができない。

エスケーカーは名を持たない。それは形を持たないということ。エスケーカーという仮初めの名を抱く彼らの存在は非常に希薄だ。

だから、名を管理する立場であるオメガは、彼らを探し出すことはできないし、彼らが認識を与えなければ、エスケーカーがそこにいることを認知することは難しい。

もっとも、希薄な形である以上、認識できないエスケーカーが名を持つモノに影響を与えることは不可能だが――すぐ横にいても気付かないということを考えて薄気味悪い。

「もう、あーちゃんはお茶目さんなんだからのお」

「お茶目ってレベルですか！」

「喚くな、スーちゃん。心配せんとあーちゃんは、『名』に対して酷いことはせんぞ」

その根拠はどこにある、と問い詰めたのは山々だったが、今は彼を捕まえて「名」を取り戻すのが先だ。

しかしだ。彼の姿は認識できない。

「何か方法はないんですか？」

「わしに言われものお」

「貴女はオメガでしょう！」

「オメガにも出来ることとできないことがあるんだのお」

ステオンは深呼吸をした。ここで言い合いをしても仕方がない。

一先ず、小屋の外に出ようと入り口のすだれを持ち上げた。

「危ないっ」

咄嗟に、オメガを横に押しつけ、ステオンは身を屈めた。

風を切って頭上を掠めたのは一本の矢だった。ステオンは腰に吊るしていた剣を鞘から抜き、前方を鋭い目で見つめる。

## VSエスケーカー

---

全くその気配を感じることができなかったが、いつの間にか小屋を複数の人影が囲んでいた。全員が全員、一様に白髪白服で、灰色の双眸をオメガとステオンに注いでいる。

「エスケーカー」

搾り出すように、ステオンが言った。

まさか、オメガの義兄である彼が、他のエスケーカーを呼び寄せたのか。

憎きオメガを殺すために。

「スーちゃん、それは違うのお」

ステオンの思考を読み取ったように、オメガは言った。

「あーちゃんは、エスケーカーとは違うのお」

「……レディ、オメガ」

確かに、彼は他のエスケーカーとは違うが――しかし、彼はやはりエスケーカーだ。

「オメガと、リーガロだな」

先頭に立っていたエスケーカーが、平坦な声音で叫んだ。それは問いかけというよりも、確認のようだった。

「その存在、抹消させていただく」

淡々と事務的に告げたそのエスケーカーに呼応するように、他のエスケーカーたちは一斉に各々の得物を持ち上げた

。

ステオンは舌打ちを漏らした。

エスケーカーがエスケーカーとなるのには、様々な理由があるが、一様に彼らはオメガを厭う。それは、名を持つ者がエスケーカーを嫌うのと同じ事なのかもしれない。だが、それ以上にエスケーカーはオメガを抹殺しようと度々、屋敷を急襲してくる。

屋敷には守りが付されていて、名の統治者であるオメガを守るために昼夜問わず兵が見回りをしている。そのため、かつて一度として屋敷内部にエスケーカーが侵入を果たしたことは――正確にいうのならば、オメガの兄である彼だけがオメガが招き入れているため屋敷内に入っているが、それ以外のエスケーカーが内部に足を踏み入れた事実は一度としてない。

屋敷にいる間は、エスケーカーはオメガに手を出せない。だからこそ、オメガが外に出たときこそが、チャンスだ。

エスケーカーにとって幸いなことに、当代のオメガは屋敷の外を出歩く機会が多い。そのことをいくらステオンが注意しても、オメガは意を介さず、一人外へと出てしまう。

もっとも、だからこそ、エスケーカーの目に留まらずにいられたのかもしれない。オメガとリーガロと一緒に行動をすれば、否応なしに目立ってしまうが、オメガ一人ならばエスケーカーの目をくらますことなど容易い。

ステオンは、オメガを守るため剣を構え、エスケーカーと対峙する。こちらは二人に対して、相手は複数。圧倒的な人数の差があったが、負ける気はしなかった。

そのとき、立ち並ぶエスケーカーの向こう、砂浜に突き刺さるように生える木の陰に、男が立っているのが見えた。彼はにやりと笑うとその姿を再度隠した。

「レディ、オメガ！ 追ってください！」

「仕方ないのお」

やれやれ、と首を振ると、オメガは走り出す。その行く手を遮るようにエスケーカーたちが動くが、

「君たちの相手は俺だ」

牽制するように剣の先を振り、オメガのために道をあける。

「スーちゃん、きーつけろよお」

「誰に言っているんですか」

勇ましいステオンの言葉に、オメガはにっと唇の端を持ち上げた。

「追えっ！」

オメガを追おうとするエスケーカーにステオンは切りかかったが、何人かは逃がしてしまう。

「殺せっ！」

エスケーカーが言った。

「殺せっ！」

「殺せっ！」

「殺せっ！」

呪いのように繰り返される言葉を聞きながら、ステオンは剣の柄を握り直す。

「生憎ですが、簡単に殺されてあげるつもりなんてないですよ」

「うわっと」

バランスを崩し、オメガはその場ですっ転んだ。足元を見れば、とび縄が絡まっている。

一体、いつ足に絡まったのだろうと、首を傾げながら、オメガは縄を解きに掛かる。

「終わりのオメガ」

頭上に影ができ、見上げれば手にした棍棒を振り上げるエスケーカーの姿。

「死ねええええ！」

「うお！」

オメガは転がるようにその一撃をさけた。

棍棒のその先にあった石が真っ二つに割れるのを見たオメガは、引き千切るように縄を解くと、エスケーカーから距離を取った。

「お主！ そんなもんを使ったらわしの頭は潰れてしまうがな！ やるなら、もっと綺麗なもんを使え！」

ステオンが聞いたら肩を落とすに違いない、どこことなくずれた叫びをあげながら、オメガもまた懐から小さなナイフを取り出す。

「……朔那」

ナイフに唇を当て、甘く囁くように呼ぶ。

途端に、小さなナイフは、大振りの剣へと変貌した。銀の柄に金の刃。柄の表面には無数の記号が、刃には図形のようなものが描かれている。

朔那は削名。名を抹消するためにアルファから与えられし剣。

「そんなものを出してどうする」

オメガを取り囲んだエスケーカーたちは声を立てずに笑う。

「終わりのオメガ。貴様は名を持つ者にとって恐るべき脅威だ。だが、名のなき我らからは何一つとして奪う事はできない」

エスケーカーはオメガとの距離を詰める。オメガはその嘲笑には応えなかった。

指先で刃の表面を撫で、感情の読めない静かな瞳でエスケーカーたちを眺める。

「さらばだ、オメガ」

それを合図に、エスケーカーたちは一斉に襲い掛かった。

最後の一人が地面に倒れたとき、ステオンは大きく肩で息をしながら、刃の先を地面に落とす。

痛みに頬を手の甲で拭えば、赤く染まる。頬を切ったらしいが、傷は浅い。これならすぐに血は止まるだろう。

気だるい疲れが息を吐くたびに全身から抜けていくのを感じる。だが、暢気に休んではいけない。早いところ、

「名」を取り戻さなければ。

歩き出そうとしたステオンは片足に違和を感じた。見れば、地面に倒れていたエスケーカーの一人がステオンの足首を掴んでいる。

ステオンは振り解こうと足を大きく動かした。

「オメガを……」

肋骨でも折ったのか、そのエスケーカーは苦しげに口を大きく開けた。

しかし、痛みさえも、そのうちに秘めるものを殺せないらしい。ぎらぎらした目がステオンを見上げる。

「オメガを、追ったのは我らの中でも殺しに長けた精鋭だ。今頃、オメガは……」

「残念ながら」

主人の真似をして、ステオンは話の鼻を折った。

地面に這い蹲るエスケーカーを、哀れみを込めてみつめる。

「残念ながら君たちの思うようにはならない」

エスケーカーが眉を潜めるのを見て、彼らはあまりにもオメガを知らなさ過ぎるのだとステオンは思った。

「俺はリーガロだ。オメガを守る立場にあるが」

ステオンは皮肉に口元を歪めた。

「レディ、オメガは俺なんかよりもずっと強いんだ」

## アルファとオメガ

---

「つまらんのお」

地面に胡坐を組んで欠伸を噛み殺す。

周囲には誰もいなかった。土の上には無数の人間は動き回ったような真新しい痕跡があったが、オメガ以外の姿を存在していなかった。

ナイフに戻した朔那を指先で跳ね上げては回す。オメガは目端に溜まった雫を指先で拭って、それから大きく伸びをした。

拍手が聞こえたのはそのときだった。

「お見事だね」

いつそこに姿を現したのか、オメガの真後ろに立った義兄はそっとオメガの乱れた髪に触れた。

「おーちゃんの手際の良さにはいつも驚かされるよ」

「見てたなら、助けてくれればよかったのにお」

頬を膨らませたオメガに、義兄は首を竦めた。

「争いごとは嫌いなんだ」

義兄はかがみ込むと、金属の欠片をオメガの手に握らせた。それは義兄が持ち出した「名」だった。

オメガはそれを愛しげに撫でたあと、ポケットに無造作に突っ込んだ。

「あーちゃん、それでテストは合格かのお」

「テスト？」

意味がわからないというように首を傾げた義兄だったが、義妹は騙されたりしなかった。

「心配せんでも、スーちゃんは立派にリーガロの役目を果たしておるぞ」

なにせ、わしの指導がいいからのお。胸を張るオメガに、義兄は、それはどうかな、と小首を傾げた。

「確かに彼は一生懸命やっているようだけどね。リーガロとして完璧とはいえないね」

「そりゃあ、スーちゃんは元々リーガロになる予定はなかったしのお」

「これもそれも、五年前の巻刃の災厄のせいだ」

忌々しげな表情を、彼は浮かべた。滅多に見られない兄の露骨な嫌悪をオメガは黙って受け止めた。否、その嫌悪さえ演技の一部であることを知っていた。

「あれさえなければ、今もリーガロは『キミノミヤ』だった」

「過ぎたことは仕方のないのお」

前のリーガロの顔を思い浮かべ、オメガは義兄にわからないように息を吐いた。

「彼は歴代稀に見る優秀なリーガロだった。完璧な守護者。完璧な制御者。完璧なリーガロ」

謳うように囁くように、褒め称える義兄。

「キミノミヤ」は死んだ。五年前の、エスケーカーが起こした巻刃の災厄で、オメガのために死んだ。そして、その後釜として、「キミノミヤ」の甥に当たるステオンが新たなリーガロとなった。

「……アルファ」

オメガは義兄を見た。兄であり、父であり、母であり、もう一人の自分であり、世界で唯一オメガが逆らえない存在である、始まりのアルファを。

「なんだい、オメガ」

いつもと変わらない優しい眼差しで、アルファはオメガを見返す。

「『死ね』とか『殺せ』とか、物騒で汚い名など、どうして生み出したのだ？」

尋ねたいことはもっと他にあったが、オメガの口から漏れたのはそんな問いだった。

「汚い『名』など存在しないさ」

くるり、とアルファは回った。白い髪の前がその後を追うように円を描いた。

「その『名』が汚く感じるのだとするならば、その『名』を発したモノが穢れている。それだけのことさ」

そういうものか、とオメガは頷いた。

ぼつり、と空から零れてきたもの。いつの間にか、天は厚い雲に覆われていた。

「空から落ちる水」が大地を染めるまで、さほど時間は掛からなかった。

「レディ、オメガ！ 何度言ったらわかるんですか」

窓から抜け出そうとしたオメガを目ざとくみつけて、ステオンはその襟首を掴んで室内に引きずり込む。

「煩いのお」

外に遊びに行こうとしたところを掴まって、オメガは不満な目でステオンを睨んだ。

「煩くって結構！ 立場をお考え下さい。窓から出入りするなんて」

名の統治者が窓から出入りするなんて情けないにもほどがある。

「だがのお、扉から出て行くのは駄目なんだろう？」

「一人では、という意味です。護衛をつけるのであれば、いくらでも」

「それじゃあ、つまらぬではないか」

退屈だと喚くオメガに、ステオンは盛大な溜息をついた。

「何を騒いでいるのかな？」

「あーちゃん！」

たった今、オメガが出て行こうとした窓からひょっこり入って来たのは、髪の色以外、オメガと瓜二つの男性——オメガの義兄だった。

「遊びにきたよ」

「わあい」

「わあい、じゃありません。この人がこの間、何をしたか覚えていないんですか」

またいつ、「名」を盗み出すかわかったものではない。

「スーちゃんは、心が狭いのお」

「狭くて結構です！」

「ほらほら、二人とも喧嘩しないで」

「誰のせいだと思っているんですか！」

叫んだステオンに、義妹と義兄は顔を見合わせると、

「スーちゃんのせい」

「君のせい」

ステオンの怒号が響いたのはその数秒後だった。